

ダニエル書 - ナンバー百七十三

教皇の影：『ヒトラーの教皇』の背後にある影響力と意図を明らかにする

Jeff Pippenger

2024-04-03

『ヒトラーの教皇』と題する書物において、著者ジョン・コーンウェルは、ヒトラーがドイツを支配していた時代に統治した後の教皇の物語を、ローマ市から追放されたその祖父と教皇ピウス九世とをもって書き起こしている。ピウス九世が修道女に変装してローマ市から逃れたとき、彼がただ一人伴ったのは、その後の教皇の祖父であった。コーンウェルはこの二人の緊密な関係を論じ、その後、その後の教皇の父もまたカトリック教会の権力中枢と結び付いていたことを明らかにしている。そうすることによって彼は、ピウス九世の時代から第二次世界大戦に至るまでの歴史における社会的、政治的、宗教的環境を描き出している。その歴史の概観はきわめて示唆に富んでいる。

11世紀、グレゴリウス7世がローマ教会の完全性を宣言したことで、教皇の僭越はさらに一段と進んだ。彼が唱えた命題の一つには、聖書に照らして、教会はこれまで誤ったことがなく、今後も誤ることはないとするものがあつた。しかし、その主張には聖書的根拠は添えられていなかった。この尊大な教皇はまた、皇帝を廃位する権能を主張し、自らが下したいかなる判決も誰にも覆すことはできないが、他のすべての者の決定を覆す特権は自分にこそあるのだとした。

不可謬性を唱えるこの者の暴君的性格がいかなるものかは、ドイツ皇帝ハインリヒ4世への彼の扱いにおいて、きわめて鮮明に示された。教皇の権威を無視することを敢えてしたとして、この君主は破門と廃位を宣告された。教皇の命令に後押しされて彼に反抗するようになった自国の諸侯の離反と脅迫におののき、ハインリヒはローマと和解する必要があると感じた。彼は妻と忠実な従者を伴って真冬のアルプスを越え、教皇の前に出て自らを卑しめて許しを請うために向かった。グレゴリウスが退避していた城に到着すると、彼は護衛なしに外庭へ通され、厳しい冬の寒さの中、頭に覆いもなく裸足で、みすぼらしい服装のまま、教皇への拝謁を許されるのを待たされた。三日間、断食と告白を続けたのちになって初めて、教皇は彼に赦しを与えることを認めた。しかもその際でさえ、皇帝が王権の徽章を再び帯びたり王権を行使したりする前に、教皇の認可を待つことが条件とされた。勝利に有頂天となったグレゴリウスは、王たちの驕りを打ち砕くことこそ自分の務めだと豪語した。大いなる論争、57。

グレゴリウス7世は「不可謬性」の擁護者だったが、そのばかげた主張が公式の教義（ドグマ）とされたのはピウス9世のときであり、彼は第1バチカン公会議でその愚かな主張を確立された教義とした。教義は1870年7月18日に可決され、十四万四千人の最初の失望のちょうど150年前の同日であった。

この歴史からわかる重要な点は、ピウス9世が第1バチカン公会議を召集し、不可謬性の教義を宣言したとき、その動機は、いわゆる「近代主義」への憎悪によるものだったということである。それは、教皇が聖書の教義を定める際に誤りを犯し得ないという考えに根ざしたものではなく、フランス革命がもたらした影響に対する教皇の反対姿勢を擁護

するためのものだった。つまり、それは最終的に共産主義と呼ばれることになるものに向けられていた。

フランス革命は、ヨーロッパ諸国の統治構造に大きな激変をもたらし、とりわけ教皇制という君主制に対する憎悪をかき立てた。ピウス9世とその右腕を一時的にローマから追い出したのは、イタリアの共和主義者による反乱であった。フランス革命が生み出したさまざまな哲学に代表される「近代主義」は、ピウス9世にとって宿敵であり、彼の不可謬性の教義は、フランス革命から生じた近代主義的な思想に対抗して教皇が行ったあらゆる主張を支えることを目的として構想されたものだった。

ダニエル書11章40節は、1798年に南の王（無神論的なフランス）が北の王（教皇権）に致命的な傷を負わせたことを示している。

ピウス九世の不可謬性の教理は、ダニエル書十一章四十節によって表される戦いと結び付いており、1869年の後半から翌年にかけて、ピウス九世は、第一バチカン公会議、すなわちバチカン第一公会議として知られる会議を招集した。その目的は、533年のユスティニアヌスの勅令によって宣言されたとおり、教皇がカトリックの首長であり、またカトリックがすべての諸教会の首位であることを *पुष्टि* するためであった。

第二バチカン公会議（Vatican II と呼ばれる）は、1962年から1965年にかけて開催された。これはカトリック教会の歴史における画期的な出来事であり、現代における最も重要な公会議の一つであった。この公会議は教皇ヨハネ二十三世の指導の下に招集され、1963年にヨハネ二十三世が死去した後は、教皇パウロ六世の在位中に継続された。この二つの公会議の明確な相違を認識することが重要である。

第一の公会議は、教皇のいわゆる「首位権」を確立するためのものであった。これは、教皇が教会の最高の統治者、教師、そして牧者であり、信仰教義を保持し、解釈する責任を負うことを意味する。教皇の権威は、教義を定義し、教理上の教令を発し、信仰および道徳に関する事柄について権威ある宣言を行うことに存しており、これは教皇不可謬性として知られている。それにはまた、司教を任命し、秘跡を規律し、教会の行政を統治する権能を含む、全教会に対する教皇の裁治権も含まれている。

第二公会議は、教会をエキュメニカルな共同体へと方向転換させるためのものだった。両公会議は、その掲げる方向性が正反対だった。保守的な第一公会議は、リベラルな第二公会議によって否定された。その二つの派閥は昼と夜ほど違っており、ファティマの三つの秘密に帰せられる予言は、まさにこれら二つの公会議によって象徴される教会内部の抗争を指し示している。

その予言は、ピウス9世が体現する首位権を擁護する陣営を「白い教皇」「善い教皇」「善い司教」とも呼ばれる存在によって表し、第二バチカン公会議と結びつけられるもう一方の陣営を「黒い教皇」「悪い教皇」「悪い司教」によって表している。二つの政治的概念の対立は、ポルトガルのファティマにあるファティマの奇跡の聖地を訪れると目に見える形で示されている。入口では、通路が片側に黒い教皇の像、もう片側に白い教皇の像を配して、その間を通るように設けられている。

したがって、その本が最終的に「ヒトラーの教皇」と呼ぶことになる男にとって、彼の出自が近代主義（南の王）と教皇首位権（北の王）との闘争に絡み合っているという事実は、彼の遺産の一部となる。

ここで考察しているこの書物の著者は、正統な立場にあるカトリック信徒であり、また、彼がこの書物を著した公言された目的は、第二次世界大戦中に在位した教皇がヒトラーやナチスを支持していた、あるいはユダヤ人その他に対するホロコーストについて何らかの責任を負っていた、との主張に光を当てることであった、ということを理解しておかなければならない。コーンウェルが、ヴァチカン第一公会議を取り仕切った右腕であったピウス十二世の祖父について論じるとき、南の王と北の王との闘争の歴史が、まさにその歴史の中に演じ出されているのである。「共和主義」の革命がイタリアに及んだとき、約一年の間、イタリア人はピウス九世をローマ市から追放し、その時以後、彼が帰還した後でさえも、教皇権が所有してきたすべては、ヴァチカン市国として知られる百十エーカーの土地にすぎなかった。

彼がヴァチカンへ帰還することができた唯一の道は、フランス軍の助力と、悪名高いユダヤ人銀行家ロスチャイルド家からの融資によるものであった。第二次世界大戦中のホロコーストにおける教皇庁の共犯関係を理性的に理解するためには、キリストの磔刑以来、ヨーロッパがユダヤ人に対して抱いてきた態度についての基本的理解が必要である。その書物は、反ユダヤ主義と人種主義とは二つの異なる態度であることを示唆し、ヒトラーのユダヤ人憎悪は人種主義的であったと主張している。すなわち、ヒトラーはユダヤ人を人間としてより劣った範疇に属する存在と見なしていたのに対し、反ユダヤ主義とは、彼らが神を殺したがゆえにユダヤ人を憎むことである、というのである。これらが実際には同一のものであるのか、それとも両者の間に現実に区別があるのかにかかわらず、ユダヤ人の苦境の現実には理解に値する。

たとえば、今日のアメリカにおいて「ゲットー」という語が用いられるとき、多くの人はそれを、貧しく荒廃した町の一面を意味するものと考え、しかし「ゲットー」という用語は、本来、中世の間にユダヤ人が居住を強制された都市の一区画、特にイタリアのヴェネツィアにおけるそれを指していた。最初のゲットーは1516年にヴェネツィアで設けられ、ヴェネツィア共和国がユダヤ人を「geto nuovo」（新しい鑄造所）として知られる市内の指定区域に閉じ込めたことに始まり、やがてそれがゲットーとして知られるようになった。

中世を通じてのヨーロッパでは、ユダヤ人はどこに住めるか、そして従事を許される職業についても制限を受けた。こうした制限は反ユダヤ主義の古い定義に基づくもので、その定義は、ユダヤ人が神を殺したという信念と、その後に起きた彼らのあらゆる問題は自らの行為によって招いたものだとする考えを指していた。

中世においては、キリスト教徒は金銭を貸し付けることも、貸付に対する利息を受け取ることもできないということが、確立された慣行であった。ユダヤ人はその制限から免除されており、金銭の貸付は、ユダヤ人に従事することが許されていた職業の一つとなった。ロスチャイルド家のようなユダヤ人銀行家たちは、従事することが許される職業に対する法的制限に応じて、両替商となったのである。ピウス9世がバチカンへ戻るための資

金を必要としたとき、もはやローマ市を支配していないことへのその苛立ちは、資金を得るためにユダヤ人に頼らなければならない必要によって、いっそう増幅された。

ローマから追放される以前、ピウス九世は、ユダヤ人および教会とユダヤ人との関係に関して、二つの陣営のいずれかに属しているかのように見えた。二つの陣営とは、ユダヤ人は何が彼らに起ころうとも、ただ自らに値するものを受けているにすぎないと信じる者たちと、他方、ユダヤ人に対していくらかの憐れみを示す傾向のある者たちとから成っていた。ピウス九世が追放されたのちヴァチカンに戻ったとき、彼が流刑以前に時として示していた憐れみは、もはや二度と示されることはなかった。流刑以前、彼はローマ市のゲッターを閉鎖していたが、帰還後にはそれを再設置し、自らの財政的損失を立て直すため、ユダヤ人に課税を開始した。

教皇ピウス9世の右腕は、「ヒトラーの教皇」の祖父にあたるマルカントニオ・パチェッリだった。彼は、教皇庁を支える特別な弁護士階層に属する弁護士だった。彼の息子も同じエリート弁護士階層の一員となり、最終的に「ヒトラーの教皇」となる孫もまたそうだった。本書は、エウジェニオ・パチェッリの祖父と父、そして彼自身の若年期と教育の歩みをたどったのち、彼が教皇庁のために働き始めた際に就いた職務を取り上げる。エリート教皇庁弁護士の系譜を引く弁護士として、彼は契約（concordats と呼ばれる）を専門とする部門の長に選ばれた。1901年、パチェッリは教皇庁国務省に迎え入れられた。

パチェッリは諸国への使節となった。予言的に言えば、パチェッリは、地の王たちと教皇制との姦淫を成就させる法的な窓口となった。1903年、ピウス10世が教皇に即位した。彼は直ちに、「相対主義と懐疑主義」を生み出した「知的毒薬」を攻撃し始めた。ピウス10世の「近代主義」撲滅の取り組みを取り仕切ったのは、パチェッリと同じ部署で働いていたウンベルト・ベニーニであった。ベニーニはかつて、世界的な歴史家の一群について、彼らにとって「歴史とは、嘔吐しようとする絶え間ない必死の試みにすぎない。この種の人間に効く治療法はただ一つ——異端審問だ！」と述べた。ベニーニにとって、フランス革命に由来する思想に少しでも共感を示す歴史家は、処刑されるべき存在だった。

公式には、ベニーニは教皇庁の宣伝省を率いていたが、非公式には、南の王に端を発した「近代主義」にわずかでも同情的なカトリック信者を特定するための秘密裏の諜報網も運営していた。最終的に1910年には、彼の活動の結果、教皇庁の職員に「反近代主義の誓い」と呼ばれる宣誓を立てることを義務づける通達が出された。それは今なお有効である。バチカンに雇用されるには、今日では共産主義的なものと呼ばれる近代主義的な思想を憎むことを誓わなければならない。

クロンウェルの本の要約として、見返しには次のように記されている。「世紀の最初の10年に、俊英の若きバチカンの法律家として、パチェッリは前例のない教皇権のイデオロギーの形成に寄与した。1920年代には、ドイツに対して権力を押し付けるために、策略と恐喝を用いた。1933年には、ヒトラーが彼にとって理想的な交渉相手となり、カトリックが社会的・政治的活動から撤退することと引き換えに、カトリック教会に宗教および教育面での優遇措置を認める協約が結ばれた。ローマから押し付けられたこの『自発的な』政治的カトリシズムの放棄は、ナチズムの台頭を助長した。」

1933年7月14日の閣議で、アドルフ・ヒトラーは、同月、パチェッリがナチスと作り上げた協定がドイツに「国際ユダヤ人に対する進行中の闘争における信頼の領域」を生み出したとの見解を表明した。

コーンウェルの著書は、ドイツがカトリック教徒多数の国であったゆえに、ヒトラーが権力の座へと上り得た主要な理由がパチェッリにあったことを示す証拠を受け入れようとしなかったカトリック教徒たちからは、好意的に受け入れられなかった。パチェッリは、一九三三年以降、カトリック系出版社、カトリック通信社、およびカトリック学校がヒトラーの進路について何事も語ることを妨げる合意を取り交わしていたのである。その著書は、その後、第二次世界大戦中に教皇となったパチェッリの明白な反ユダヤ主義的傾向をたどっている。その本から、少なくとも三つの事項が、きわめて信頼性の高い史料に基づいて立証しうる。

第一は、ダニエル書第十一章に示されている北の王と南の王との戦いである。その戦いにおいて敵対するのは、無神論に対するカトリック主義、すなわち共産主義に対する教皇である。もう一つの点は、教皇が第二次世界大戦中、無神論に対抗する代理軍としてナチズムを用いたのと同様に、1989年にはソ連邦の無神論に対抗する代理軍として背教したプロテスタント主義を用いた、ということである。また本書は、ファティマの奇跡から出て来たサタンのメッセージによって表される、内的小および外的な預言的構造をも明らかにしている。

ダニエル十一章十一節および十二節に描かれているラフィアの境界戦争は、現在ウクライナで展開している境界線の戦争を表している。古代のその戦争は熱戦であったが、後者は第二の代理戦争であり、そこでは代理軍が致命的な交戦に関与している。ラフィアは、その境界戦争が北の王と南の王との間のものであることを明らかにしているが、預言は、間もなく到来する日曜休業令までは、ツロの淫婦は忘れられ、イゼベルはサマリアにおり、ヘロデヤはヘロデの誕生日の宴を欠席したことを教えている。この現在の歴史における北の王の役割についてのその三人の証人が示しているのは、彼女が舞台裏で糸を引いているということである。彼女が忘れられている間に起こる熱戦、代理戦争、そして冷戦は、彼女の代理軍によって遂行される。

ロシアは南の王であり、現在、西側世界のグローバリストたち、主としてアメリカ合衆国の進歩主義的民主党员および名目だけの共和党员（RINO, Republican In Name Only）によって資金提供されている境界線上の戦争に関与している。ダニエル書11章40節において、アメリカ合衆国が北の王の代理軍として表象されるとき、その二つの預言的特徴は軍事力と財政力である。アメリカ合衆国は、1989年に行なったのと同じ働きをウクライナにおいて遂行しており、ロシアに対して教皇を助けているのであって、地上でウクライナを防衛している代理軍は、主流メディアでさえ否定できないほどナチ支持者で満ちている。ローマは今や、第二次世界大戦という熱戦において、また1989年に、ロシアに対して戦うために用いたのと同じ代理軍を用いている。『Hitler's Pope, the Secret History of Pius XII』を読みなさい。

次回の記事でこの研究を続けます。

同様に、神が愛するヨハネに将来の時代にわたる教会の歴史を開示しようとしておられたとき、七つの教会を象徴する燭台の間を歩まれる「人の子のような方」を彼に示すことによって、ご自分の民に対する救い主の関心と配慮の確証をお与えになった。ヨハネは、教会が地上の権力と最後の大いなる戦いをするさまを示される一方で、忠実な者たちの最終的な勝利と解放をも見ることを許された。彼は、教会が獣とその像とに致命的な闘いへと巻き込まれ、その獣の礼拝が死刑をもって強制されるのを見た。しかし彼は、戦いの煙と喧騒のかなたに目を向け、シオンの山で小羊と共にいる一群の人々を見た。彼らの額には獣の刻印の代わりに、「父の御名が記されて」いた。さらに彼は、「獣とその像とその刻印とその名の数に打ち勝ち、神の琴を手にしてガラスの海の上に立つ者たち」が、モーセと小羊の歌を歌っているのを見た。

これらの教訓は私たちの益となるものです。私たちは神に対する信仰を堅く保たなければなりません。というのも、私たちの目の前には人々の魂を試す時が迫っているからです。キリストはオリーブ山で、御自身の再臨に先立つ恐るべき裁きを語られました。「あなたがたは戦争と戦争のうわさを聞くであろう。」 「民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、至る所で飢饉と疫病と地震が起こるであろう。これらはすべて産みの苦しみの初めである。」これらの預言はエルサレムの滅亡の際に部分的に成就したが、終わりの時代に対してはより直接的に適用される。

私たちは重大で厳粛な出来事の入り口に立っている。預言は急速に成就しつつある。主は戸口に立っておられる。まもなく、すべての生ける者にとって極めて重大な時期が私たちの前に開かれようとしている。過去の論争は再燃し、新たな論争が起こるだろう。私たちの世界で繰り広げられる光景は、まだ夢にも見ていない。サタンは人間を手段として働いている。憲法を改変し、日曜遵守を強制する法律を制定させようと努めている人々は、その結果がどうなるかをほとんど理解していない。危機がまさに目前に迫っている。

「しかし、この大いなる危機にあつて、神のしもべたちは自らを頼みとしてはならない。イザヤ、エゼキエル、ヨハネに与えられた幻において、天が地上で起こっている出来事とどれほど密接に結びついているか、また、神に忠実な者たちに対する神の配慮がいかに大きいかを、私たちは見る。世界は支配者不在ではない。これから起こる出来事の計画は主の御手の中にある。天の威厳の主は、諸国の運命も、御自分の教会の事柄も、みずからの配慮のもとに置いておられる。」『証言』第5巻、752、753頁。